

京都大学	博士(文学)	氏名	Evseeva Elena
論文題目	ロシア語不定代名詞の分布 — 否定が関わった環境を中心に —		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>本論文は、ロシア語不定表現 (indefinites) のうち、否定とのスコープ関係が特に問題になる <i>ni</i>-words、<i>libo</i>-words、<i>nibud'</i>-words という3系列を分析の主対象としている。</p> <p>その3系列について、Tatevosov (2002) をのぞくこれまでの先行研究では、直接否定環境においては <i>ni</i>-words が使われ、<i>libo</i>-words と <i>nibud'</i>-words は使えない、ということがほぼ当然の前提とされている。しかし、実際には直接否定の環境で使われている <i>libo</i>-words と <i>nibud'</i>-words が数多く存在している (例えば次の (1) の例を参照)。</p> <p>(1) Dazhe Natasha ne znakoma s kem-<i>nibud'</i> iz nih / s kem-<i>libo</i> iz nih / even Natasha Neg knows with whom-<i>nibud'</i> from them with whom-<i>libo</i> from them <i>ni</i> s kem iz nih. <i>ni</i> with whom from them ナターシャでさえ彼らの中の 誰かと / 誰とも 知り合いではないのです。</p> <p>本論文は、このような直接否定環境をはじめ、種々の否定的環境において、機能の重複を見せるこれら不定表現の分布と、その分布に影響を与えている要因について考察し、まとめたものである。</p> <p>これらの不定表現の分析 (特に <i>nibud'</i>-words と <i>libo</i>-words の分析) にあたっては、フォーカス構造、論理的スコープ関係と、統語論的構造 (およびそれを反映した語順) との間のかかわりによく注意を払った分析を行う必要があるというのが、研究全体を通じての基本的主張である。</p> <p>なお、理論的には、本研究は、ミニマリスト・プログラムの枠組みを使った分析 (Zeijlstra 2004, 2008, 2010, Haegeman and Lohndal 2010) の流れに立っている。</p> <p>全体は大きく2部構成になっており、さらに付録を付している。以下は論文の構成にそった、章ごとのまとめである。</p> <p>第1章は、研究の考察対象となる不定表現の機能的及び形式的な特徴をまとめ、先行研究での当該要素の分布の記述は不十分であり、修正されるべき点があることを示し</p>			

たものである。

第2章では、本研究が考察の対象とする *ni*-words と *nibud'*-words と *libo*-words の生起可能な環境について、先行研究における観察の不十分な点を修正しながら詳しい記述を行っている。具体的に言うと、今まで先行研究の中では、同節の否定辞と共に起する不定表現としては *ni*-words、それ以外の否定的環境（多くの場合いわゆる下方含意文脈 downward entailment contexts としてまとめられている）では *libo*-words、そして、いわゆる irrealis 環境では *nibud'*-words（と *libo*-words）という分布が前提になっていることが多かった。第2章では *nibud'*-words が幅広い irrealis 環境、DE 環境で使われる一方、*libo*-words に関しても DE 環境よりかなり広い環境で使われ、大幅な重複が見られることが示されている。

第3章では、ロシア語の不定表現だけでなく、不定表現全般に関する重要な先行研究を、言語類型論的研究、統語論的研究、意味論的研究という順に、枠組みごとにまとめ、最後に先行研究で不十分であったり問題があったりした点のうち本研究で取り上げるものについて指摘している。

第4章では、先行研究で提案されている分析を土台に、本研究が採用する考え方についてまとめられている。とりわけ、それぞれ *ni*-words、*nibud'*-words、*libo*-words の認可の基本的なメカニズムについて、生成文法の中でも特に、Rizzi (1997, 2001) や Cinque (1999) 等に代表される地形論的 (Cartographic) 統語論の知見をふまえた本研究での分析の概要を説明している。特に、[+tensed] な TP 節やその拡張以外の節でも、オペレータ要素のスコープ関係の解釈とかかわって音形をもたない機能範疇要素とそれが有する素性指定を設定する必要性について、意味論をふまえた先行研究の成果も参照しながら、地形論的統語構造にもとづく分析を行っている。また、*nibud'*-words の認可と関係する、音形を持たない機能範疇には複数のタイプのものがあることを示している。なお、「節」概念の明確化の必要性や局所性条件 (locality condition) についても議論を行っている。具体的に言うと、複合文における分布から見える認可と「節」の範囲について論じている。

以上が本論文の第I部である。続く第II部ではさらに、*ni*-words、*nibud'*-words、*libo*-words を含む文のうち、特に否定との論理的スコープ関係解釈の可能性に留意しながら、より詳しい分析を行っている。

まず、第5章では、*nibud'*-words の分布について、従来ほとんど注意されてこなかった、*nibud'*-words の否定スコープ内解釈の可能性について詳しい考察が行われている。章のはじめでは、含意を通じて PPI 要素の否定スコープ内解釈可能性を説明する関連先行研究 (Baker (1970) (5.2.1.)、服部 (1989) (5.2.2.)) を取り上げその欠点についてふれている (5.2.3.)。その後、ロシア語についてそのような環境に関する記述の詳細化を行いながら、本研究の具体的分析が提示されている。その過程で、通常の否定解釈に関わる PolP よりも高い位置で、極性にかかわるもう一つの機能範疇投射

として、SigmaP 投射を本研究が仮定する根拠について説明している (SigmaP 投射は、TopP をその補部に立つ位置で投射が想定されている)。

具体的に言うと、*nibud'*-words の生起可能環境について、*nibud'*-words が否定スコープ内に解釈され得る環境、そうでない環境、それ以外の環境 (モダリティ構文) の順に詳しい記述を行う中で、通常よりも高い位置に否定オペレータ (Op) が位置することになる SigmaP 投射は常に可能であるわけではなく、特定の節において設定されるものであることを論じている。すなわち、*nibud'*-words の否定スコープ内解釈が困難である節は、「伝達系節 (単節を含む)」、「思う」、「推測副詞」、モダリティ構文など」と「判断系動詞の従属節」(単節、叙実動詞、発話系動詞) の 2 種類に分けて整理することができる点について、議論を行っている。

また、*nibud'*-words の否定スコープ内解釈を可能にする SigmaP 投射が困難であるこれら「伝達系節」と「判断系節」に関し、SigmaP 投射が困難である点は、*nibud'*-words の認可以外にも、次のような現象にもうかがわれることについて詳しい考察を行っている。

(i) 否定のスコープ (ある種の副詞などをどこまで否定スコープ内に取れるか)

具体的に言うと、*nibud'*-words が否定スコープ内に解釈され得る構文の例に共通しているのは、副詞の分布が通常の単節とは違う点である。すなわち通常否定のスコープ内に現れない副詞が当該の構文では否定スコープ内に解釈され得る (例えば、過去形における *opjat'* 'again' や *uzhe* 'already' は単純文では肯定としか共起できないのに対して、当該の構文では、*nibud'*-words が否定スコープ内に解釈される場合は、文法的である。一方、*nibud'*-words が広いスコープを取る読みでは分布は単節と同じである)。こうしたことから、*nibud'*-words が否定スコープ内で解釈される節では、否定は通常より高い位置でスコープを取ることができると結論を導いている。

(ii) '否定フォーカス' の可能性 (述語否定によって構成素否定を表せるか)

nibud'-words が否定スコープ内に解釈される節とそうでない節の間では、フォーカス構造の違いが見られることを指摘している。具体的に言うと、単節をはじめとする *nibud'*-words が否定スコープ内に解釈されない節において、述語動詞を否定することによって、他の文中の要素を否定のフォーカスとする解釈を得ることはできないのに対して、*nibud'*-words が否定スコープ内に解釈され得る節においては、基本的に否定のフォーカスを他の要素に当てることができる点について考察を行っている。

さらに、通常 SigmaP 投射が困難である節であっても、ある種の、つまり、本論文で「指標」と名付けた各種表現が生起している場合には、そうした投射が可能である点についても論じている。また、そうした「指標」としては、ある種の主節動詞 (Baker

(1970) のいう「特別述語」、二重否定、アスペクトの用法、反期待の小詞や、尺度性、限定性のフォーカス小詞の使用等の場合があり得る。

少なくともロシア語では、そのような「指標」は明示的なものでなければならない。名詞句内での *nibud'*-words の認可を扱った第6章では、名詞の拡張投射(DP)においても、動詞の拡張投射(CP)におけるのと同様に、否定極性や各種不定表現のスコープ解釈・認可にかかわる諸機能範疇投射がほぼ並行的に含まれていると考えないといけない。

DPにおいても、CPの Force⁰ と並行的に、*nibud'*-words の認可が REF 素性が [-]値を持つ D⁰ によって行われていると考えれば、名詞句内の *nibud'*-words の使用が可能となるケース (cf. (2)) や意味的な否定とのスコープ関係 (cf. (3), (4)など) を説明できる。

(2) Nam nuzhny kakie-*nibud'* /-*libo* dokazatel'stva.
to_us(we. DAT) be_necessary. PL which-*nibud'* /-*libo*. NEUT. PL. NOM
proofs. NEUT. PL. NOM
私達には何らかの証拠が必要である。

(3) Otsutstvie *kakih-libo* / *kakih-nibud'* spetsii mozhet povlijat'
absence which-*libo* which-*nibud'* spices can influence
na vkusovye kachestva etogo bljuda.
on gustatory quality this dish
何らかのスパイスのなさがこの料理の味に影響を与えるかもしれない。

libo-words: $\exists > \neg$ otsutstvie, \neg otsutstvie $> \exists$

nibud'-words: $\exists > \neg$ otsutstvie, ?? \neg otsutstvie $> \exists$

(4) Otsutstvie *kakih-libo* / ??*kakih-nibud'* spetsii zastavilo nas
absence which-*libo* which-*nibud'* spices made us
otkazat'sja ot prigotovlenija etogo bluda.

give_up from cooking this dish

何らかのスパイスのなさが私たちにこの料理を作るのをあきらめさせた。

\neg otsutstvie $> \exists$ 解釈について文法性が示されている

($\exists > \neg$ otsutstvie 解釈は *libo*-words でも *nibud'*-words でも不可)

また、*sluh(i)* 'rumour', 'hearsay' や *pros'ba* 'request' といった名詞を例に、名詞の意味的な性質 (例えば、*absence* のように否定を含意するようなもの) だけではなく、名詞句自体には時制の投射はないにも関わらず、名詞句によって表されている事

象が参照時より前のこと、つまり確定したことを指すのか、参照時以降のこと、つまり確定していないことを指すのかという発話者の知識、認識、文脈のあり方が、当該要素の認可可能性を左右すると考えられる種々の例をあげている。さらに、そうした認可の仕組みは、名詞句内で完結しているわけではなく、名詞句の用いられた節の述語動詞との相互関係の中で決まる点についても指摘が行われている。

第7章では、(a) 移動可能な位置・範囲、(b) フォーカス構造に関する制限、(c) 論理的なスコープ関係関連の制約について、それぞれ *ni*-words、*nibud'*-words、*libo*-words の順に考察を行っている。

まず、*ni*-words の認可と局所性条件と移動範囲に関しては、*ni*-words の認可が行われてから (*ni*-words に指定された uPOL[neg] 素性が照合された後)、さらに上の位置に移動することが可能である点についてふれ、単文および複合文（それぞれ主文否定、補文否定）の例を挙げ、情報構造上の要因やその他の動機によりさらに上の位置に移動して音声化されること自体は禁止されているわけではない。

続いて、本研究が考察対象とする不定表現の分布の背後に存在する PF での制約として、おおよそ以下の二つのものが見られることを主張する。

- (i) 論理的なスコープ関係に関する制約(不定代名詞と他の要素との間での論理的スコープ関係が、ロシア語においてどのような統語論的構造、およびそれを反映した語順により、表現されうるかに関する制約)

ロシア語においては語順が論理的なスコープ関係を反映する傾向が強く、そのため、論理的に量子子に相当する不定表現が PF 制約の対象となる。その中でも特に、*nibud'*-words の、*kazhdyi* 'each' や *vse* 'all' のような普遍量子子要素に対するスコープの取り方や、文中での位置等についてより詳しく考察を行い、*nibud'*-words の認可の仕組みについて論じられている。そして、*kazhdyi* 'each' や *vse* 'all' のような普遍量子子より狭いスコープをとるため、これらの要素が統語構造上もともと下の位置にあった場合、PF でも overt な移動を伴う必要がある。

- (ii) フォーカス構造に関する制約(トピックやフォーカスといった情報構造上の役割がロシア語において、どのような統語論的構造位置、およびそれを反映した語順により、実現されうるかに関する制約)

当該要素が次のようにまとめることができるフォーカス構造の一般的な制約にも従っていて、それによって文中での生起可能な位置が限られる場合がある。

- (5) 条件 TF：語順の自由度が高いロシア語ではあるが、その際、トピック位置(文頭)には主題化にふさわしい要素が、フォーカス位置(動詞句の前あるいは文末)には焦

点化にふさわしい要素がきていること。

つまり、*libo* -words は nonspecific indefinites という内在的意味を有しているが、それは本来、トピックやフォーカスになるには適さない性質のものであり、*libo* -words は本来フォーカスにも、トピックにもなりにくいのである。一方、上述の通り、否定辞を含む文において、基本語順の場合、否定辞より前にある位置はトピックの位置であるか、フォーカス要素がくる位置である。このことにより、否定辞を含む文において、*libo* -word や *nibud'* -words が否定辞より前に来ることに対して制限がかかることになるということを考慮することにより、先行研究で記述が不十分であった部分を含め、より十全な分布の記述が行えることを示している。

libo -words や *nibud'* -words の否定辞の前への移動や主語としての出現は一様に認容度が低いわけではなく、以下に示したケースをはじめ、*libo* -word や *nibud'* -words を含む要素がトピックとして解釈され得る場合は比較的に認容度が高い。

- (i) 特定の集団の中の不特定の対象を指す場合や(特定の人物との)対比が含意されている場合など
- (ii) *libo* -words が形容詞をもとに作られている場合
- (iii) *libo* -word がより大きな構成素(名詞句)の一部である場合

第8章ではロシア語不定表現の分布と認可についての議論のまとめである。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、ロシア語不定表現 (indefinites) のうち、否定とのスコープ関係が特に問題になる *ni-* を接頭辞に持つ単語 (*ni*-words)、*libo* を接尾辞に持つ単語 (*libo*-words)、*nibud'* を接尾辞に持つ単語 (*nibud'*-words) の 3 系列を分析の主対象とし、その分布を生成文法、特に極小理論 (Minimalist Program) の枠組みで記述したものである。

極小理論では、統語操作のためだけに必要とされ、意味解釈を必要としない統語特徴 (uF) を、意味解釈部門より前に削除しなければならないとする。この削除は一般的には機能範疇が持つ意味的に解釈可能な統語特性 (iF) と別の言語表現の持つ解釈不可能な一致特性 (uF) との照合操作によりなされる。一致特性は照合のために特定の機能範疇の指定部に移動し、照合されて uF が削除される。本論文では、極小理論の一つである地形論的 (Cartographic) アプローチを採用している。このアプローチは、この機能範疇を多く用いて、これまで語用論や談話文法の問題とされてきた発話の力に対応する機能範疇を立て、それとの照合によりさまざまな表現の認可条件を記述するのが特徴である。

ロシア語の *ni*-words は、否定辞との共起が義務的で肯定文には使えない。これに対し、*nibud'*-words、*libo*-words は肯定文においても現れるものであり、否定との共起は義務的ではない。このため *nibud'*-words、*libo*-words の否定とのスコープ関係については従来詳しい観察はなかった。本論は、*nibud'*-words、が否定のスコープ内に入る解釈に関して、それらを認可する解釈可能な機能範疇を独立した証拠から設定し、その機能範疇との照合により認可する方法を提案している。

nibud'-words、*libo*-words は従来、非特定の不定表現 (non-specific indefinites) として、ある種の自由変数を表し、談話領域によって、存在閉包により束縛されると考えられてきた。*nibud'*-words、*libo*-words は、談話により特定の (specific) 解釈が要求される環境では使うことができない。論者は、節を導く要素には疑問文、平叙文などの文タイプを表す機能範疇 Force^0 があるとし、 Force^0 が持つ一致特性 $\text{iREF}[-/+]$ の値により、文タイプによりその節内に非特定不定の不定表現が生起可能かどうかを決めるとする。さらに Force^0 にある要素は未来形、疑問形、推量モダリティとかかわる副詞が生起する文など、広く非現実的な意味を表す節を補文としてとる場合、 $\text{iREF}[-]$ の指定を持たなければならないとする。これにより *nibud'*-words、*libo*-words が持つ $\text{uREF}[-]$ の特性を照合し、削除することが可能になる。論者はこのメカニズムにより、*nibud'*-words、*libo*-words が、 $\text{iREF}[+]$ を持つ、一回の過去事態を表す肯定文や、*znat'* 「知っている」など補文が事実であることを前提とする叙実述語の補文内では使えないことを説明している。

論者はこのような $\text{iREF}[-]$ を持つ Force^0 がない場合、あるいは $\text{iREF}[+]$ を持つ Force^0 がある場合でも、否定辞のスコープ内に入る場合は *nibud'*-words、*libo*-words が認可され、 $\rightarrow \exists$ というスコープ解釈を受けるという事実を発見している。論者は

このような環境では否定のオペレータは通常より高い位置にあると主張する。その証拠として(1)過去を表す文では通常否定のスコープ内で解釈できない副詞である *opjat'* 「また」、*uzhe* 「すでに」が、*nibud'-words*、*libo-words* が否定辞のスコープにある場合は否定のスコープ内での解釈が可能である、(2)ロシア語の否定辞 *ne* は通常述語否定しかできないが、*nibud'-words*、*libo-words* が否定のスコープに入れる場合には構成素否定が可能になる、という事実をあげる。これらの事実は否定オペレータが通常的位置より高い位置にあることにより説明される。論者は、この高い位置での否定オペレータが可能なのは、特別な指標がある場合に限られることを示した。その指標とは、二重否定の環境、通常未完了が予測される場合に完了アスペクトが使用されている場合、*tak i* 「結局」のような反期待の小詞の使用、*dazhe* 「さえ」、*tol'ko* 「だけ」のような限定性のフォーカス小詞が使用されている場合、さらに主文述語が、補文が表す事態の評価を表す場合である。これらはすべてある種の反期待の含意を持つものである。以上の現象を記述するために、論者は、*uEmph* [+], *iREF* [-] の特徴を持つ Sigma^0 という機能範疇を Force^0 より下に仮定し、 Sigma^0 の指定部に否定のオペレータを位置させることにより、*nibud'-words*、*libo-words* が否定のスコープ内に来る解釈が可能であることを記述している。

このように本論文は *nibud'-word*、*libo-words* が否定のスコープに入れるという現象を初めて指摘し、精密に生起環境を記述するとともに理論的な位置づけを与えた優れた分析であると言える。しかし、問題点も散見する。地形論的アプローチは非常に強力な理論であり、どのような現象もあらたに機能範疇とを立てることによりアドホックな記述が可能になるからである。扱う現象に対し理論装置が大きすぎる印象は否めないし、問題の現象が統語的に扱われるべきか否かについても議論が不足している。 Sigma という機能範疇が本論文で扱った現象とは独立に統語的に必要とされるものであることを示す必要があるだろう。しかし、論者もそのことは自覚しており、そのためのデータは十分そろっているとみられる。今後の研究に期待したい。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2011年2月21日、調査委員4名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。